

## 史料をめぐる新しい論点

渡部圭一\*

WATANABE Keiichi

### New Issues Concerning Written Materials

From a historical point of view, one characteristic of Japanese villages is that they had high literacy rates and that the people living there utilized various documents or records for their lives. That's why a school known as historical folklore studies has developed among Japanese folklorists.

In recent studies of Japanese history, a new trend can be seen in the treatment of written materials. The new method is not to describe past events using information from the documents, but rather to reconstruct the social environment in which it actually functioned. Historians changed the perspective of their field from being a container of old information to being a vivid media in actual society.

On the other hand, in Japanese folklore we have had little direct discussion on written materials themselves in spite of our abundant experience and techniques for using them. In fact, many folklorists are now distancing themselves from written materials and historical matter, under the call of "living folklore."

As a new issue concerning written materials, this paper focuses on some documents in the long process of transmission from generation to generation and aims to grasp them as living media creating an original perceptual communication around itself, not as indirect clues like time capsules conveying facts from the past. We are paying particular attention to the visual style in expressing folk words.

This standpoint will enable us to define the unique function of written materials in an audiovisual space. Furthermore, we can expect to put this visual style correctly in complex relationships with the oral, plastic, architectural, behavioral, and other media, into which Japanese folklore have mainly concerned itself up to now.

キーワード：文字史料 伝世史料 コミュニケーション 伝承の表現論 歴史民俗学

---

\* 早稲田大学人間科学学術院

## 1. なぜ史料か

ここで史料、とくに文字史料論の刷新をめざすにあたって、塚本学氏の「江戸幕府のかな表示地名調について」は示唆に富んでいる。取り上げられているのは享和3（1803）年の全国の地名のかな表示調査で、これは幕府が各地の領主に命じて支配下の郡村名の漢字に読みがなを付して書きあげさせた事業である。従来、幕府の手もとにあったのは元禄15（1702）年に作成された諸国郷帳の漢字地名のみであった。つまりそれまで幕府は「全国の村の漢字表示名は知ることができたが、その口頭での呼称は知らなかったのである」と氏は述べている [塚本 1985: 60]。政権の側のならわしも含めた、時代のフォークロアを予感させる。

そもそも権力を中心とする漢字文化の世界がめざましい広がりを見た近世という時期、地名は非常にこみいった状態におかれていた。ひとつにかならずしも口頭の呼称に忠実とは限らない漢字地名の増加や、漢字化による呼称地名の変改がおこる [同: 64-65]。村々自身の公文書、たとえば検地帳の上でも小地名まで含めた漢字表記化がすすむ [65]。漢字が新たに命名や表記を豊かにしていく面がある一方で、口頭の呼称もたしかに持続していく [66]。振りがなによるユニークな地名調査も、そのような口頭の伝統と文字による表記の交渉史のひとつに当たる。幕府の地誌編纂史研究などで評価される論文だが、一片の記録史料の背後に非文字とも文字とも割り切れない多層的な口頭／かな／漢字の言葉の生態を読み取った構想力はさらに刺激的である。

政権と村落さえ繋ぐ言葉のコミュニケーション——そのような大胆な視野で史料のフォークロアを構想できないだろうか。民俗学の伝来のマニフェストとは、底深く徹底的な文字史料批判に立った、公的な記録とはべつの私的な命名の伝統の発掘を求める歴史叙述刷新の訴えであった。しかし権力のつくる歴史と民俗が支え生み出す歴史とは、いま相互の緊張と生成のフィールドで描き直すほうに活路を見出したいのだ。当面、ごく小さい議論に限らざるをえないことを承知の上で、小稿が史料そのものからの反転的な立論をはかる狙いはここにある。文字史料とは改めていかなる存在か、その史料像にはいかなる再認識が可能か、できるかぎり具体的な研究例に即した考察を行いたい。

## 2. 史料研究の三つの視点

日本村落の文字史料といえば、まずは1980年代後半からの近世史学を中心とする歴史学の動向をみるのが至当である。その動向として第1に挙げられるのは、読み書き算盤という言葉に示されるような、いわゆる〈リテラシー〉をめぐる研究である。青木美智男は、近世国家の村請制にとって村役人の識字能力が前提になっていることを指摘し [青木 1985: 239-240]、その基盤として村々の文字教育に注目をうながした [青木 1990: 84-85]。最近では入札の史料を用いた識字能力の精査や、実際の村政参加における識字の機能の分析もある [高尾 2001: 14-15]。一方、村請制とはべつの識字の広がりを目をむけた高橋敏は、書籍の購入など「文字文化への投資」を交えた消費生活の展開や [高橋 1988: 27]、手習塾が村社会に作り出す新しい関係とその葛藤 [高橋 1990: 208-210] に筆を及ぼした。伝存する文書史料を所与のものとして識字力の所産として自覚し、それを支配や社会のなかではたらく媒体として位置づけなおす文書社会論の着

想は、1980年代後半の歴史学の収穫だったといえる。

2つ目に挙げられるのは、〈文書〉や〈書籍〉レベル、いわば知識や情報のメディアとしての史料の取り扱いである。書物・出版研究の独自の歩みはその一端で、近世史のほか書誌学、思想史、文学、宗教史、書道史などの学際研究を生み出している。書物を介した特定の思想の形成や流布というより、書物を享受する読者の側からの考察が活発だ。村落レベルでは書物の集積としての蔵書の発見があり、その形成にかかわる貸し借りや書写などネットワークの問題を手にすることで分析幅を飛躍的に拡大した〔小林 1991〕。さらに反転して、刊本ではなく写本に軸足を置く立場からは、特定の表題をもつ書物という様式にどのような知識が書きとどめられていくか、書名と内容形成の動態を捉える着想も得られた〔小池 1993: 54-58; 小池 1999b: 9-10〕。

こうした研究では、特定の表題の書物の成立過程などの知見より、その1冊1冊が集められ、写され、読まれる局面に多くの可能性が見出されている。同様の発想は書籍だけでなく公私にわたる村方文書に関しても盛んである。その最たるものは、近世史学において村の精神世界を扱うべく登場した由緒(書)研究であろう<sup>1)</sup>。由緒研究は一種の史料学や史料管理論の観点をとともなうことが多いが、これは由緒が由緒書や編纂物として史料化されるだけでなく、歴史意識が総じて書証を求め、由緒の形成にあわせてしばしば文書の管理の厳密化〔大友 1999: 10〕が生じるからである。由緒の権威づけに用いられる偽文書とその地域性〔山本 1990: 27-28〕、役負担回避のための由緒書の流布と「学習」〔井上 1989: 55-59〕といったことだ。当時の村の“現在”を舞台とする、古文書ならぬ生きた文書の生態学は、文書管理論として本格的に展開されていく。

さて史料をめぐる3つ目の視点は、〈文字そのもの〉というしかない尺度のものである。たとえば冒頭にかかげた塚本の好篇は、書き言葉／口言葉の矛盾といった文字媒体の固有性にまでおりたって、地名という固有名詞の表現の変化を描くことに成功したものだ。じつは80年代の歴史学で文書主義社会が関心を集めたころ、こまやかな書体や字体のレベルの史料像はかなり重要な主題であった。カタカナのひらがなの権力との関わりにおける位相差〔網野 1988〕、文書ことばの洗練、文書上のひらがなから漢字交じりへの変化〔長野県編 1987; 塚本ほか 1987〕、口言葉をそのまま表記する傾向のある女性の日記史料の特徴〔藪田 1985; 1995〕などがそれにあたる。残念なことに、以後の研究例では“なぜ文字なのか”という原理的な問いは後景化し、たとえば読書のような、文字史料本体からすれば間接的な現象の考察に重点が移された感はぬぐえない。まさに記号としての文字のかたちや書きぶりを扱うべき古文書学も、近世の村方文書については未整備のように見受けられる。

書物や文書といったかたちを解体するには、ひとつに1文字1文字のレベルで字面のありかたを捉えるのがよい。真野俊和は独特の書体の六字名号塔や起請文など、文章をなす以前の字の印象に目をとめている〔真野 1999: 34-35〕。まじないの字の印や儀礼文書の難解な文字遣いなどにはさらに豊富な事例があろう。不可思議でときには禍々しい字面の印象はそれだけで想像力を喚起し、言葉から話への展開を促す。山田巖子はケッカイとよばれる異形の子どもの伝承の由来を医書・産科書に求め、病名のひとつ「血塊」の字面とその解体が、言葉の響きとともに作りあげた異常児像と位置づけた〔山田 2000: 88-89〕。あるいは文書語の「仍而如件」の絵解きとして発生したと思いき人面牛体の妖怪・クダンの図像化も、文書とその字面からの想像の広がりをつぶさに知らせる〔佐藤 1993〕。従来しばしば語られてきたような、文字と非文字、文字と声との対比といったフィールドにせまるにも、結局、上のような言葉と文字のレベルの原論を突き

詰めるしかないように思われる。

### 3. 「伝世」史料研究の可能性

ところで以上かかっていた3通りの研究例をつらぬく史料認識には、ひとつの方向性が見出せるように思える。民俗学における数少ない資料論にひきよせて考えておこう。井之口章次は民俗資料の存在の仕方を文献資料・考古資料と対比してこう述べている。民俗資料は「日本中のどれかは、以前から知っている」ことだから厳密な「発見」はない〔井之口 1960: 54-55〕。一方、出土品や文献は「伝世品を別にすると（略）いったん外界から断絶し、社会的必然性がわからなくなつてから、とつぜんわれわれの眼前にあらわれることが多い」〔井之口 1969: 31〕。民俗学に発見なし、これは至当な見解だ。一方、史料に対して、ある役割を発揮すればタイムカプセルよろしく「古文書」化して蔵に蓄積されていく、あるいは地下に埋まっていくとする見方には再考の余地がある。

たとえば山本英二が紹介する、寛永10（1633）年から現在まで書き継がれている由緒書〔山本 2004: 3〕は特異すぎる例であろうか。しかし文書という素材は、繰り返しその“現在”を経験してきた存在として、そのときどきの存在状況に置き戻すようにして読み込む余地がある。文書管理論の主題である、史料の「伝世」環境の問題も当然ここに繋がってくる。つまりモノとしての環境やその後の管理プロセスの情報まで累積させたものとして、蔵のなかの文書（群）は面目を一新したのである。ここには文字史料像の重要な転換——過去のひとつの史実の証拠を求めて「古文書」から間接的かつ客観的な情報を取り出すだけの扱いをこえた、モノとしての文字史料のもつそれぞれの“現在”への視点の転換を認めることができるように思われる。

史料をタイムカプセルの見方から脱却させる認識はすでに歴史考古学のものでもある。たとえば遺物の出土は大昔からあったできごとだという。村々の伝説にかかわって縄文土器が保管され、ときには加工されて宝物視される事態などが紹介され、一般の「製作→使用→廃棄という遺物のライフサイクル」や廃棄後の埋没→発掘という過程におさまらない遺物のありかたに認識が及んできた〔桜井 1999: 12-13〕。あるいは、これまで遺物と民具の近さもしくは議論の俎上に上ってきたが、谷川章雄が指摘するとおり、遺物として発掘された墓標が厳密に実測され保管される傍らで近世以来の地上の墓標がみむきもされていないような状況はいびつである〔谷川 1991: 25〕。伝世する考古資料と埋もれた民俗資料の異同にあらためて目をひらくべきなのである。

こうした点、最近では浅岡康二に独自の資料論がある。民具を念頭におきながら、浅岡は文字史料もまた文字が書かれたモノだと一続きに捉える。これを「発見されたモノ」と「伝世したモノ」の2通りに整理して〔浅岡 1999: 56-59〕、「伝世したモノ」の伝世過程の再評価を促す趣旨だ。実際、モノとしての書物や民具としての書物といったことは、近年の事例分析が充実させてきた見方であり〔小池 2001: 2〕、広く捉えれば、史料群の伝来や管理、逆に管理外の廃棄にまで目配りをきかせた網野善彦の史料学の提唱〔網野 1996: 5-6〕とも呼応する。かくしてモノ史料と文字史料を貫く学際的な資料認識として、伝世史料の再評価とその伝世環境の主題化という動向が新たにうかびあがるのである。ここには民俗学としていかなる課題が設定できるだろうか。

#### 4. 史料の自立へー戦後学史から

文字史料に資料価値を認めるかどうか、その如何に民俗学としての自己証明を賭けた時代があった。平山敏治郎の文字史料の再評価に端を発した、牧田茂の強烈的な反発とその前後の経過は有名である。いまその全体をなぞることはできないが、「歴史(正統的な、狭義の歴史学)は文献を史料とし、民俗学は伝承を史料とするというのがごとき速断」[平山 1951: 7]を改め、文字史料に積極的な資料価値を認める平山に対して、牧田の声高な批判があげられた[牧田 1951: 33-34]。史料を積極的に扱うべきか排除すべきか、また現存しない史料上の対象や村落以外の階層を含むか否かに始まったやりとりは、すぐに直接の課題を歴史の復原におくか「現代性」を尊重するかという“性格論争”へ飛び火した[牧田 1951: 34]。

『国史と民俗学』流の文字史料批判がそれだけ切り出されて肥大化した局面は、まさにこうした戦後民俗学におけるものである。もとより史料差がそれだけでアイデンティティになるわけがなく、その後、史料の形態差は問題ではなく要は書かれた“内容”次第であると論争は終結にむかっていくのも[千葉 1951; 宮田 1969; 平山 1969a]、当然の成り行きというしかない。そこで肝心の“内容”について斬新な規準が出されることはなかったし<sup>(2)</sup>、この間、フィールド経験にたった史料像が形づくられていったわけでもなければ、史料そのものの批判や評価についてなにか実質的な議論が交わされた形跡もない。誤解をおそれずいえば、要するになしくず的に史料派は容認されていき、理論構成としては、史料という存在はつねに“内容次第”の従属的な地位に置かれてきたのである。この点、以後の歴史民俗学の洗練のなかでも改善の様子はなく<sup>(3)</sup>、史料は歴史のための情報源として従属化・外在化されたままである。

結局、村落の文字史料について、いまだれほどのことが分かっているのだろうか。最近でこそ、曆書や陰陽道書、家相書・家相図、職人巻物などの偽文書など、文字史料そのものをとりあげてリテラシーの問題と関連付けるなどした成果も散見するが、いささか特異な事例に傾いたきらいもある。村落社会のフィールドワークにとって馴染みぶかい、生活帳簿というべき種々の村落史料の存在について、和歌森太郎はさすがの目配りで、村規約や若者組の規約、田植え唄や白挽き唄などの詞章の記録、寺社縁起や由緒書、奉公人の労働管理や水番・溝浚人の記録、家ごとの贈答や祝儀・不儀の記録、葬送の役割分担表、宮座や講の帳簿などを列挙したことがある[和歌森 1969b]。ただ、たとえば家ごとに付きものというべき香典帳さえ、いまだ様式面を含めた基礎的分析[増田 2001]に乏しいし、講集団などで夥しく引き継がれる横帳のヴァリエーションはさらに深刻である。

実際の研究例の経過のなかで、多少なりとも文字史料へ自覚を進めてきたまれなケースとして、日記史料の取り扱いはいよい指針になる。近世名主日記の「民俗」記載に注目し、その活用を訴えたのは福田アジオだが[福田 1990]、それは単なる新資料の追加にすぎず、日記とは何か、なぜ日記を使うのかといった点に配慮はない。日記史料の内容と様式をともに問うた論者として、古島敏雄の数篇の論考はじつに画期的である。作付順序や作物ごとの圃上存在期間の圧倒的な精度での復原[古島 1974]は日記史料ならではものだが、同時に日記の保管状況、家としての複数の種類の帳簿群のなかでの農業日記の独立、その書式の変化など、様式面の精査[古島 1973; 1987]を通じて、古島は近代簿記や日記の普及にさきだつ近世百姓としての記帳能力の形成を

認めようとする。この点、高橋敏が消費生活の豊富化にともなう家計帳簿の書式の精緻化を指摘するのもに通じる〔高橋 1988: 14-15〕。

日記利用の方向性に対しては、小川直之による的確な整理がある。ひとつは「記述内容を素材とした具体的な研究」、もうひとつは「単に一つの日記を素材とすることから一步進んだ試み」としての、「日記というものの存在自体についての研究」〔小川 1996: 47〕である。前者は日本民俗学における史料利用のありふれた形といえるが、日記という形をとることの意義は捨象され、「民俗」の記録という従属的な位置づけにならざるをえない。小川自身はそれとはべつに、後者の「資料論」を試み、大きな生活枠組みの変化と日記の成立との関わりを予想する〔小川 1996: 52〕。いわば日記存在を社会的なコミュニケーションのなかに位置づけなおす作業だ。言われてみれば、天候予測や作柄判断などを行う日和見の伝統のなかに近世の名主日記を位置づけた宮田登の王権論をわれわれは手にしているし〔宮田 1992〕、ここから後続の研究の広がりも位置づけなおせるかもしれない〔小池 1999a〕。小稿が試みたいのも、外的な情報源としての史料から史料そのもののフィールドワークへ、史料から発想することの可能性である。

## 5. 視覚表現のフィールド

さきにまとめた史料研究の3つの視点のうち、日本の民俗学としての史料認識との隔たりがまだ大きく、それだけに新たな議論の試金石ともなりうるものは、第3の論点、すなわち文字史料という存在のなかに言葉の文字表現に固有のはたらきを見出していくやり方である。たとえば宛て字という現象を考えてみる。ある立場では、文字化を不当な意味の介入とみなし<sup>(4)</sup>、民俗語彙のかな表示に独自の意味を込めようとする。文字化をなにか信用ならぬ操作とみなすのは広く私たちの習い性でもある。一方、鈴木寛之が指摘するように、学史として進んだ語彙離れのなかでもカタカナ表示という方針は維持されてきた〔鈴木 1995: 38〕。要するに、どう書くのですかという質問は絶対漏らせない項目ではないし、まして史料表記の現物をいちいち見せてもらうには及ばない。書かれた文言に独自のスタイルを認めるフィールドワークはそう多くないのである。

そのひとり萩原龍夫は「村人・氏人・氏子の意味の変遷」〔萩原 1962〕と題する論考で、宮座史料上の「村人」「氏人」の語史を整理することによって、祭祀組織の成員の変化を跡付けた。近世以降の特権家々を指す「モロト」は中世村落の主導者「ムラウト＝村人」に由来するといったように、漢字表記の裏にある訓みをベースにして分析がなされていくが、そのなかでは表記の用字選択の背景〔同: 291〕、訓みに対応しなくなった表記〔299〕やその修正〔304〕、くずし字の誤読に起因する文字遣いの変化〔299-300〕までが徹底的に問われている。一般にモロトは表記差が著しい語彙だが、原田敏明のコレクションでは、「諸戸（また諸人、諸頭、諸友、守人、師人、師統とか、諸子、諸古、あるいは物頭、物党、室徒、室人、村人、村生人などと書いたり、いたりしている）」とある〔原田 1976: 52〕。肥後和男も、もろとの表記を「諸子」から「師統」に「唱替」えたとする文久元年の史料例を採録している〔肥後 1938: 26〕。

このような場面では、おそらく言葉の変化は発音と漢字表記の組み合わせで起きており、一概に表記の側を宛て字とみなすことはできない。宛て字とはフィールドレベルでは意外に複雑な事象である。たとえば筆者は屋号の語彙を例に、持ち物や帳簿に漢字表記される屋号と呼びかけに

使われる口頭の屋号を対比し、難読の漢字を含めて正確な対応関係がとられていること、またそれが人びとに高い精度で識別されることなどを報告した [渡部 2007a]。そこで宛て字とは、それぞれの言葉の漢字表示と口頭の読みとの対応の緊密さの程度、あるいは積極的な“宛て字化”(異説の発生)とその排除のせめぎあいとして規定できる。というより、それはもう具体的なやりとりのなかの認知や知覚の問題と捉えるしかなくなる。書くことと声为重層する焦点として、アクチュアルな言葉の表現の場があらためて前景化してくる所以である。

たとえば時枝務は河童の類の詫び証文を紹介するなかで、文字の判読が困難で文書の体をなしていないもの、文字といわれるものがじつは自然石の表面の凹凸にすぎないものがあることに触れている [時枝 2004: 145]。日系移民の墓標を題材に、漢字の銘文が意味内容以前に図像としての視覚効果をもち、ともに「視覚的イメージを創出する媒体」[後藤 1995: 62-63]としてはたらく様相が報告されたこともある。当の記号がそもそも文字として成り立っているのかどうか、その瀬戸際を捉える作業は刺激的だ。実際のはたらきはそれを目にする人びとの見る目次第、ということは、問題になるのはモノとしての史料が依存する一種の視覚的コミュニケーションの状況である。文字史料とは一見静的にみえて、その実、かなり動的な存在ではないのか。

モノ媒体を扱ってきた民具研究こそ、むしろこうした着想を先取しているかもしれない。よく知られた宮本常一の波形藁マブシの発見はいかにも鮮やかだ。現行の回転マブシ以前、幕末の養蚕需要の爆発的な拡大を支えた技術的な要因は、ただ藁や茅を波形に折り曲げて作るマブシの発明であったと宮本は予想する。ところがそれは「一度使用すれば波形はくずれて二度の使用にたえない」、ほとんど「民具ともいいがたいような」道具なのである [宮本 1979: 15]。民具以前というべき造形パターンへの注意深さは安室知のものでもある。漁具の一種シバツケは、もとは田に施肥された刈敷が回収されて漁具となったもので、それも引き上げられたあとはよい燃料となる。この過程を追って安室は「民具という形をとった一瞬のとき」[安室 1996: 84] だけではない、その前後を含めたモノのサイクルを発見する。

このように造形とは、しごとで「一瞬」の成立と解体を繰り返す、状況依存的な面をもっている。同じように、筆者が行った真宗村落の読経と経本のありかたの事例分析でも、モノとしての経本には興味ぶかい動静がみられた。人びとはみな自前のホンを持っていて、読経の場には必ず1冊を持参する。特定の読経の時間になるとホンがいつせいに開かれ、みな眼で追い(老眼鏡をかける)、かつ一体感ある声をあげて、その場の読経を成立させる。しかし経典の内容からいうと、ホンに書かれていることは読経の時ごとに見られてはたらくだけで、ふだん改まって読まれる機会はない。文字表現もその内容からすれば、その場その場の声の実現を繰り返して存立していく面をもつ。版面に言葉を外在化させているとはいえ、書物のような明確なかたちをとるモノにとっても具体的な実践との距離は必ずしも開いていくばかりではないのである [cf. 渡部 2007b]。

これ以上の伝承論を進める紙幅はもうない。しかし1村でも数千からときには数万点にのぼる日本の巨大な村方文書群、あるいは数知れぬ書物媒体に載せられた膨大な知の存在、これらを想起するまでもなく、情報やメッセージをストックしていく入れ物としての文字媒体の役割はたしかに卓抜したものがある。そしてそのような不可視化方向の静的な累積とは反対に、文字は一面では具体的なコミュニケーション状況に依存して、一回ごとの視覚媒体としてのはたらきを繰り返す動的な起点でもある。はたして文字はどれほど自律的なはたらきをもち、視覚ベースの表

現の空間を支配的に形成しうるものか、また声の言葉やほかの視覚媒体との間でいかなる消長をみせるのか——文化史のなかの文字の力を図るひとつの規準はこのあたりにあるかもしれない。すくなくとも従来、印象論の域を出なかったといわざるをえない口承と書承、あるいは文字文化と非文字文化の対比といった課題を実質化していく上で、文字表記と声の拮抗する場のありかたの注視は貴重な方途となる。

このさきに構想できるのは、史料と伝承をめぐる一種の表現論の可能性である。ここまで対比してきたモノと史料にしても、単なるアナロジー以上の意味をもちはじめ<sup>(5)</sup>。造形・かたちもまた一種の視覚的表現なのであり、言葉における文字表記と声、さらには図像、建築や彫像、身振りやしぐさなど、ひとまとまりの表現論のフィールドで、異なる表現様式どうしの複合や交渉の問題として分析の俎上にのぼるはずだからである。聴覚と視覚の世界にはすでに圧倒的なパースペクティブがあるが〔川田 2001; 2004〕、それによって相対化されるはずの文字文化の世界の側に着実な研究があまり見受けられないのは奇異なことである。ましてや口頭伝承研究における声の質的分析に比肩するだけの、文字媒体そのものに向きあう“原論”はいまだ着手されていない。

## 註

- (1) 由緒論にはすでに多くのレビューがあるのでそれに従うが、「役」負担論、家意識と村共同体の変動、近代まで続く史蹟・名所の成立、身分集団、国家と儀礼の関わり、本所の宗教者統制など、さまざまな局面の由緒が取り上げられ、焦点的な論点をなしてきた。家や村の歴史編纂〔岩橋 1993〕はまた、藩や国家規模の歴史調査と書物編纂ともまったく相似の営み〔白井 1990; 1995; 羽賀 1994; 岩橋 1996〕であったことから、18世紀後半ないし19世紀以降の日本社会に由緒の時代、歴史の時代といわれる新たな歴史像がもたらされたことは記憶に新しい。
- (2) ただ史料重視派の語る“内容”の規準といえば、一回起／多起の区別が繰り返し持ち出されるにすぎなかった〔平山 1951: 8; 千葉 1951: 18; 亀山 1969: 28; 宮田 1969: 38〕。かたやその「内容」の「民俗」で本当にいいのかが問われたようにはみえない。背後にあるべき大枠の問いは、和歌森太郎の自己批判のすえの歴史観の表明を別にすると〔和歌森 1969a〕、必要性の提言〔平山 1969b〕にとどまったといわざるをえない。
- (3) さきほど性格論争への展開をいま飛び火といったが、この前後、歴史学・歴史叙述との向き合いはますます深刻な問題になっていたのだから、「現代性」の主張は時宜を得たものであっただろう。“眼前の村落”を絶対視しない平山論〔平山 1951: 5〕もさることながら、それ以上に、和歌森や堀を含めた論者にとって歴史は所与の扱いになっていた〔堀 1987 (1951) : 115; 和歌森 1981 (1947) : 8〕。なぜ歴史かといえば、せいぜい「民俗」は歴史的存在だからと、いわば“対象のせい”にして間に合わせてきたにすぎない〔e.g. 平山 1951: 3; 和歌森 1981 (1949) : 411〕。ここにも学史の憂鬱がある。
- (4) 一例として、昭和30(1955)年6月付で柳田国男が『総合日本民俗語彙』に付した序文にはこうある。「例えば地名というと、京都の人は全く知らなかつた地形、若くはそれほど必要のなかつたような特別の情況というものを、地方では言葉にしておりますが、それに対する漢字がないというだけで、今日までに忘れられずに伝わっているものが幾つかあるらしいのです」。末尾は誤植ではない。意味づけの介入として漢字を捉え、それと並行するもうひとつの意味の伝統を見出そうとする趣旨である。

- (5) いずれにしても、さきにみた「メディアとしての民具」を文字史料と並立させる提言〔浅岡 1999: 53〕、また民具の個体ごとでなく「社会」のなかに置き戻して民具のはたらきを捉える視点〔倉石 1984: 45〕などが、ここでの史料のフィールドワークと同じ指向をもっているのは興味ぶかい。

## 文献

- 青木美智男 1985「幕末期民衆の教育要求と識字能力」『開国(講座日本近世史7)』有斐閣
- 青木美智男 1990「近世の文字社会と村落での文字教育をめぐって—『長野県史』通史編近世と網野善彦氏の近業に刺激されて—」『信濃』42(2)
- 浅岡康二 1999「民俗学的な資料としての「モノ」とその記憶」国立歴史民俗博物館編『民俗学の資料論』吉川弘文館
- 網野善彦 1988「日本の文字社会の特質をめぐって」『列島の文化史』5
- 網野善彦 1996「史料学の発展のために」『日本中世史料学の課題—系図・偽文書・文書—』弘文堂
- 井上 攻 1989「増上寺領村々の由緒と諸役免除闘争」『日本史研究』324
- 井之口章次 1960「民俗探訪」『日本民俗学の調査方法(日本民俗学大系13)』平凡社
- 井之口章次 1969「文献資料と民俗資料」『日本民俗学会報』60
- 岩橋清美 1993「近世後期における歴史意識の形成過程—武蔵国多摩郡を中心として—」『関東近世史研究』34
- 岩橋清美 1996「地域の歴史と権力の歴史—江戸幕府の地誌編纂における寛政期の意義—」村上直編『幕藩制社会の地域的展開』雄山閣
- 大友一雄 1999『日本近世国家の権威と儀礼』吉川弘文館
- 小川直之 1996「日記と伝承」『歴史民俗論ノート—地蔵・斬首・日記—』岩田書院
- 亀山慶一 1969「これまでの文献資料と民俗資料に対する考え方」『日本民俗学会報』60
- 川田順造 2001「無文字社会における歴史の表象—西アフリカ・モシ王国とベニン王国の事例—」『口頭伝承論 下』平凡社ライブラリー
- 川田順造 2004「肖像と固有名詞—歴史表象としての図像と言語における意味機能と指示機能—」『人類学的認識論のために』岩波書店
- 倉石忠彦 1984「造形伝承の階層性」日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗研究大系第5巻 造形伝承』國學院大學
- 小池淳一 1993「東方朔遡源—近世陰陽道書の成立に関する考察—」『文経論叢』28(3)
- 小池淳一 1999a「『豊凶考察の為月観察の記録(仮題)』—解題と翻刻—」『人文社会論叢 人文科学篇』2
- 小池淳一 1999b「東方朔目耕—近世陰陽道書の読書態様とその意義—」『人文社会論叢 人文科学篇』3
- 小池淳一 2001「書き伝えの民俗—陰陽道書の展開と再生—」『信濃』53(1)
- 後藤 明 1995「「ことば」と「かたち」の狭間で—歴史考古学的資料としての墓石と多民族社会における文字表象について—」『物質文化』59
- 小林文雄 1991「近世後期における「蔵書の家」の社会的機能について」『歴史』76
- 佐藤健二 1993「クダンの誕生—話のイコノロジー・序説—」『国立歴史民俗博物館研究報告』51
- 白井哲哉 1990「地誌調所編纂事業に関する基礎的研究」『関東近世史研究』27
- 白井哲哉 1995「江戸幕府の書物編纂と寛政改革」『日本歴史』563
- 真野俊和 1999「文字に思いがこもる時」『水莖』27

- 鈴木寛之 1995「民俗学における語彙研究の視点について」『信濃』47(1)
- 高尾善希 2001「近世後期百姓の識字の問題—関東村落の事例から—」『関東近世史研究』50
- 高橋 敏 1988「近世小農の消費生活と教育・文化の創造」『歴史評論』461
- 高橋 敏 1990「近世村落と手習塾—手習塾九十九庵の実証的研究—」『近世村落生活文化史序説—上野国原之郷村の研究』未来社
- 谷川章雄 1991「地下に埋もれた民俗資料」『月刊文化財』338
- 千葉徳爾 1951「史料と資料」『民間伝承』15(5)
- 塚本 学ほか 1987「地方史研究のありかたをめぐって（二）」『信濃』39(10)
- 塚本 学 1985「江戸幕府のかな表示地名調について」『信濃』37(11)
- 時枝 務 2004「呪符・守札と偽文書」久野俊彦・時枝務編『偽文書学入門』柏書房
- 長野県編 1987『長野県史通史編第4巻 近世1』長野県史刊行会
- 萩原龍夫 1962「村人・氏人・氏子の意味の変遷」『中世祭祀組織の研究』吉川弘文館
- 原田敏明 1976『村祭と座』中央公論社
- 肥後和男 1938『近江に於ける宮座の研究』東京文理科大学（『肥後和男著作集第2期』冬至書房、1993）
- 平山和彦 1969a「民俗学と「歴史」の問題」『日本民俗学会報』60
- 平山和彦 1969b「方法論および問題意識ということ」『日本民俗学会報』60
- 平山敏治郎 1951「史料としての伝承」『民間伝承』15(3)
- 福田アジオ 1990「民俗資料としての日記—民俗学における計画記録と偶然記録—」『民俗学の進展と課題』国書刊行会
- 古島敏雄 1974「地主の記帳に現われた作付交替」『近世日本農業の構造（古島敏雄著作集3）』東京大学出版会
- 古島敏雄 1973「一農家の帳簿組織の形成過程」『信濃』25(9)
- 古島敏雄 1987「農家帳簿の利用—被官制度研究の過程を想起して—」『日本古文書学論集13 近世Ⅲ』吉川弘文館
- 堀 一郎 1987（1951）『民間信仰（堀一郎著作集5 神と人）』未来社
- 牧田 茂 1951「民俗の時代性と現代性—日本民俗学の目標について—」『民間伝承』15(6)
- 増田昭子 2001「南会津における祝儀・不祝儀の「野菜帳」」『史苑』62(1)
- 宮田 登 1969「文献と伝承」『日本民俗学会報』60
- 宮田 登 1992『日和見』平凡社
- 宮本常一 1979「民具学の提唱」『民具学の提唱』未来社
- 安室 知 1996「民具前と民具後—カリシキにみる物質⇄エネルギーの循環—」『民具研究』111
- 藪田 貫 1985「話し言葉と古文書」『歴史評論』424
- 藪田 貫 1995「文字と女性」『岩波講座日本通史15 近世5』岩波書店
- 山本英二 1990「浪人・由緒・偽文書・名字帯刀」『関東近世史研究』28
- 山本英二 2004「村の由緒、イエの由緒」『日本歴史』673
- 山田巖子 2000「産科書の中の「血塊」」『世間話研究』10
- 和歌森太郎 1981（1947）『日本民俗学概説（和歌森太郎著作集9 日本民俗学の理論）』弘文堂
- 和歌森太郎 1981（1949）「民俗学の方法」『和歌森太郎著作集9 日本民俗学の理論』弘文堂
- 和歌森太郎 1969a「民俗資料の歴史学的意味」『歴史研究と民俗学』弘文堂
- 和歌森太郎 1969b「近世民俗史料のとらえ方」『歴史研究と民俗学』弘文堂
- 渡部圭一 2007a「屋号の表記・記帳と口誦—横帳の蒐集と分析から—」筑波大学民俗学研究室編・発

行『羽黒山麓の民俗—山形県鶴岡市藤島町—』

渡部圭一 2007b 「経本と読経の伝承論—「御文章」読誦をめぐるモノ・表記・声—」『民具研究』136